溜池通信 vol.682 ***Biweekly Newsletter*** *January 15th 2020*

双日総合研究所
吉崎達彦

Contents **********

特集：2020 年版・台湾選挙ウォッチング 1p
＜投票日翌日の”Taipei times”紙から＞
”Taiwan needs absentee voting” 「台湾は不在者投票を必要とする」 7p
＜From the Editor＞ 孤独のグルメ、台北編 8p

****

特集：2020 年版・台湾選挙ウォッチング

年が明けてまだ半月ですが、何ともいろんな事件が起きるものです。カルロス・ゴーン被告の国外脱出、米軍によるスレイマニ司令官殺害とイランによる報復攻撃。そしてウクライナ民間航空機の誤射事件。そうかと思えば米中が第 1 次合意で署名し、トランプ大統領の弾劾裁判が間もなく始まるなど、目まぐるしい日々が続いております。

そんな中で本誌の今年第 1 号では、台湾の総統選・立法院選挙を取り上げます。4 年に 1 度、台湾で選挙があるときは、かならず現地に見に行くことにしていますが、今年も 1 月 10 日から 13 日まで台北に出張してきました。蔡英文総統が史上最高得票で再選されたことは報道の通りですが、変化の激しい台湾政治はその裏側がまことに面白い。以下、台湾政治の定点観測をご報告します。

●台湾選挙はなぜかくもストイックなのか

過去の経験からいって、台湾の選挙でいちばん面白いのは投票日前夜である。選挙運動が許されている前夜の午後 10 時まで、2 大政党が台北市内で大集会を行う。国民党は各地から党員を多数動員して、壇上には芸能人なども呼んで華やかに支持を訴える。民進党は、演説の合間に寸劇なども含めて分かりやすく会場を盛り上げ、それこそロックコンサートのように一同が熱狂する。両党の個性がよく表れている。

あいにく、今年は選挙前日に福岡市内で用事があったので、1 月 10 日夜の便で福岡空港から台北入りすることにした。福岡からだと台北はやや近いのだが、それでも到着時間は午後 10 時半頃となる。ところが駐機場が開かないとかの理由で、飛行機内でずいぶん待たされた。何が起こっているのかと思ったら、台湾桃園国際空港が大変な混雑なのである。そこでやっと気が付いた。投票のために、皆が海外から帰ってきているのだ。選挙の時の台湾は、日本で言えばお盆のような民族大移動期となるのである。

台湾の選挙は、信じられないくらいストイックなルールが設けられている。

① **不在者投票ができない**。
② もちろん海外投票制度もない。
③ 今住んでいるところではなく、**戸籍がある生まれ故郷に帰って投票しなければならない**。
④ 投票所には身分証明書と印鑑を持参すること。
⑤ 投票時間は**当日の午前 8 時から午後 4 時まで**の 8 時間のみ。
⑥ 当日の午後 9 時にはほぼすべての投票所で開票作業が終わってしまう。

今年の場合、1 月 25 日が旧正月である。だったら故郷を離れている有権者は、1 カ月に 2 度も「帰省」することになってしまう。特に海外に出ている留学生などは、試験がある時期に旅費もかかるので、投票にはかなりの負担を伴うことになる[1]。

投票日の 1 月 11 日は幸いにも好天に恵まれたが、**これだけスパルタ式の選挙制度で 74.9%という投票率**は立派である。「不在者投票アリ」「投票時間延長アリ」で 5 割程度というわが国の投票率が恥ずかしく思えてくる。もともと台湾の投票率は高く、前回は 6 割台であったが、今回は再び 7 割台を回復した。やはり関心が高い選挙だったのだろう。

〇投票率＝再び 7 割台に

選挙	2020 年	2016 年	2012 年	2008 年	2004 年	2000 年	1996 年
投票率	**74.90%**	66.27%	74.38%	76.33%	80.28%	82.69%	76.04%

もっとも 1 月 12 日付の Taipei Times 紙の社説は、「そろそろ不在者投票制度を導入すべき」との論陣を張っている（本号の p7 に抄訳を掲載）。不在者投票のみならず、海外投票制度も導入する方が良いと思うのだが、この社説を読むと問題の複雑さが浮かび上がってくる。つまり**台湾で投票要件を緩めると、いろんな問題が生じかねない**のである。

まず、現在の台湾は総人口 2350 万人のうち、ざっくり 100 万人程度が大陸本土で仕事をしていると言われている。その全員に「海外投票」や「電子投票」を認めた場合、どんな工作が行われるか分かったものではない。そうでなくとも、大陸の中国企業で務める台湾人が、「旅費も休暇も出してやるから、投票してこい」（どっちに入れるべきか、わかっているだろうな！）と言われた、といった噂はよく耳にするところである。

つまり現行の選挙制度は、「問題が起きないように」厳しくしてあるのであって、**下手に緩めると自分たちの選挙結果が信用できなくなる**。何しろ台湾にとっては、「民主主義こそが中国に対する防波堤」なので、制度には万全を期さねばならない。逆に中国側からすれば、台湾の選挙に疑義が生じるだけで「御の字」ということになる。

[1] 実際の学生たちは、「試験には追試があるが、投票は 4 年後を待たなければならない。だから投票の方が大事」などと言い慣わしているそうである。

2020 年選挙の場合は、香港からボランティアが大勢やってきたそうである。「台湾の皆さん、投票に行ってください。私たちには自分たちの指導者を選ぶことができません」と呼びかけたとのこと。これはさぞかし胸に響いたことだろう。

●「党派色の強いメディア」にも驚き

現地で選挙速報を見ていると、これまた日本人には信じがたいことがたくさんある。まず、**「国民党系と民進党系では、メディアが伝える開票速報の数字が違う」**。国民党系の「中天」と民進党系の「民視」では、有意に数字が違う。つまりあからさまな「贔屓」が行われている。だから蔡英文再選を望んでいる人は、「中天」を見ている方が安全だ、などという変なことになる。

さらに「出口調査をしない」ので、メディアが「当確」を打たない。極端な話、候補者が負けを認めないと選挙報道が終わらない。さすがに今回のように大差であれば、嫌でも敗北宣言が出る。しかし過去には 2004 年選挙のような僅差もあり、このときは「陳水扁総統 6,471,970 票（50.11％）、連戦国民党主席 6,442,452 票（49.89％）、無効票 337,297 票（2.5％）」であった。負けた側がよくぞ引き下がってくれたもので、この辺も**「民主主義こそが安全保障」というお国柄のせい**ではないかと思う。

今回の結果は下記のような大差で、蔡英文総統が獲得した 817 万票は史上最高の得票数であった。国民党の韓国瑜候補は意外なくらいあっさりと敗北を宣言し、みずからの支持者に対して融和を訴えた。「韓粉」と呼ばれる熱狂的な韓氏の支持者は不満だったようだが、とりあえず「良き敗者」を演じてくれた。

〇総統選挙結果＝前回に引き続き大差の決着

＜2020 年＞
＊蔡英文－賴清徳（民進党）　8,170,231 票、57.13％＝当選
＊韓国瑜－張善政（国民党）　5,522,119 票、38.61％
＊宋楚瑜－余　湘（親民党）　608,590 票、4.26％
＜2016 年＞
＊蔡英文－陳建仁（民進党）　6,894,744 票、56.12％＝当選
＊朱立倫－王如玄（国民党）　3,813,365 票、31.04％
＊宋楚瑜－徐欣瑩（親民党）　1,576,861 票、12.83％

ただし上記の数字をよくよく見ると、国民党は前回の選挙よりも 170 万票も増やしている。**韓国瑜候補としては、党内に向けて胸を張れる結果**なのである。おそらくこの後、国民党内部では、敗戦の責任を巡って路線闘争が始まる。その中で、韓国瑜はある程度の発言権を確保できるのではないだろうか。

前回の選挙では、朱立倫という外省人の中でも「エリート」（高級藍）が候補者であった。それに比べて今回の韓国瑜は、同じ外省人の中でも「雑草派」である。そして歴代の馬英九など国民党エリートは、彼らを無視してきたという怨念がある。いわば、最近はやりの**「エスタブリッシュメント対ポピュリスト」の構図を党内に抱えている**のである。

投票日の翌日には、台北市内のコンビニで新聞を買い集めてきた。この紙面がまた党派色丸出しで面白い。「蔡英文連任　得票破 817 萬」（工商時報）や「緑完全執政」（経済日報）と書いている新聞は、おそらく民進党系なのであろう。

ところが逆に**「蔡英文狂勝」（中国時報）と書く新聞もある**。「国民党惨敗　緑委過半完全執政」というサブタイトルがいかにも悔しそうである。2 面には敗戦分析が書かれていて、その順番がさらに興味深い[2]。

1. 郭台銘（テリー・ゴウ）が党の分裂を招いた
2. 韓国瑜は候補者としてもの足りなかった。
3. 党主席だった呉敦義が最大の戦犯である。
4. 欧米が蔡英文を支援していた。
5. 香港における反中デモの激化。

パッと見て、この順序は逆だろう、と感じるところである。普通に考えれば、**香港情勢こそが民進党最大の勝因だったはず**である。しかし「負けた時には身内が真っ先に責められる」というのは、どこの国でも共通の現象であるらしい。

敗因の筆頭に挙げられた郭台銘は、今回は出馬を見送ったものの、おそらく豊富な資金力をバックに「次」の機会を狙ってくるだろう。ちなみに郭台銘も「雑草派外省人」の出自である。**党内に亀裂を抱えた国民党は、今後は分裂含みとなる**のではないだろうか。その場合、中国は台湾内部に「話し相手」を失ってしまうことになりかねない。

●民進党は「絶体絶命」から「完全執政」へ

今回選挙では、総統選と同時に行われた立法院選挙でも民進党が過半数を得ている。「勝ち過ぎ」と言われた前回選挙から、下記の通り 7 議席減らしてはいるけれども、実はその他の政党の中に支援した候補者が 4 人いるという。すなわち**「隠れ民進党」を足すと 65 議席となり、ほとんど無傷**と言っても過言ではない。

ちなみに 2016 年選挙で若者票を集めた新政党「時代力量」は、今回は伸び悩んだ。この間に、無党派層に人気のある柯文哲台北市長は、「台湾民衆党」を立ち上げて 5 議席を確保している。2024 年選挙においては、文字通り台風の目となりそうだ。

〇立法院選挙＝民進党が単独過半数を維持

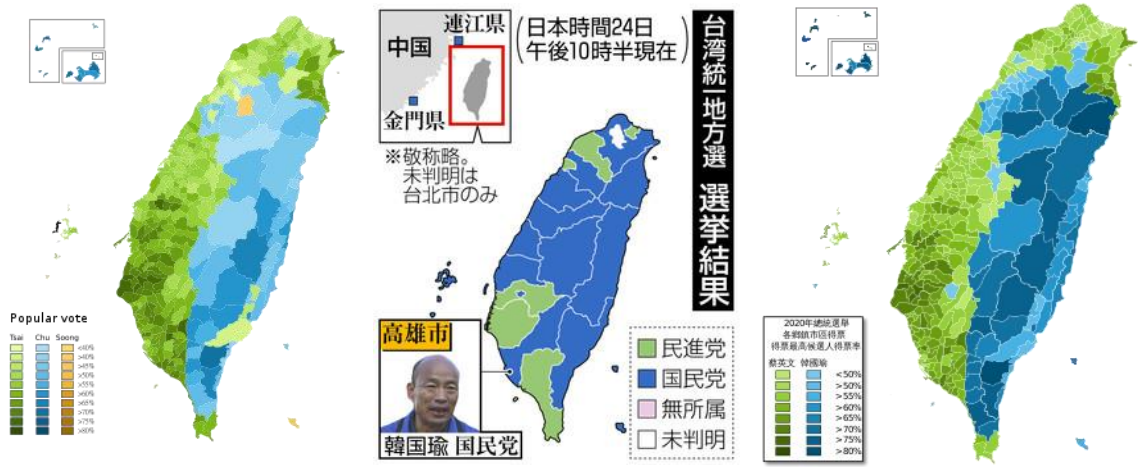
	民進党	国民党	台湾民衆党	時代力量	その他	合計
2020 年	**61**	38	**5**	3	2	113
2016 年	68	35	―	5	5	113
2012 年	40	64	―	―	9	113

[2] 繁体字を見るとこんな風に読めるのだが、「誤読」があるかもしれないので念のため。

「完全執政」（総統と立法院における多数）を得た民進党は、ほんの 1 年前には「絶体絶命」とされていた。2018 年秋に行われた統一地方選挙で大敗したからである。下記のように、2016 年総統選→2018 年地方選→2020 年総統選の得票を色分けすると、**わずかな間に台湾全島が緑→青→緑と塗り替わっている**ことがよく分かる。

〇選挙結果の激変ぶり

2016 年総統選挙　　**2018 年統一地方選挙**　　**2020 年総統選挙**



Wiki2016 年中華民国総統選挙　　東京新聞 2018 年 11 月 25 日　　Wiki 2020 年中華民国総統選挙

ほんの 1 年間でこれだけの変化が起きるのだから、台湾政治の変化はまことに目まぐるしい。世間的には、「習近平が『一国二制度』を台湾に迫ったこと」と、「香港における抗議デモの広がり」が理由とれている。が、おそらくそれだけではないだろう。

1. 地方選挙ではローカルな問題が重視されるが、**総統選挙では台湾の位置づけがテーマとなる**ので、おのずと争点が違ってくる[3]。習近平周辺は 2018 年秋の選挙を見て、「この調子なら蔡英文の再選はない」と強気に出たのだろうが、それは失敗だった。
2. 蔡政権 1 期目の成果が、やや時間差をおいて認識された。同政権は過去 4 年間で、①アジアで初めての同性婚合法化、②法人増税と引き換えの低所得者向け所得税減税、③公務員や軍人向けの年金優遇の廃止、などの政策を実施している。一部で反発を受ける改革も含まれているが、とにかく成果を出していた。対立候補の韓国瑜・高雄市長が「言うばっかり」なのに対し、**現職ならではの安定感があった**。
3. 2018 年末頃をボトムに台湾経済がじょじょに改善し、昨年後半には 3%成長の軌道に乗り、株価も上昇していた。その原動力は、「台湾企業の本土回帰」というよりも、単純に**半導体サイクルが底打ちしたこと**であろう。

[3] この辺り、米国の大統領選挙と中間選挙の関係によく似ている。中間選挙の勝利は、必ずしも大統領選挙には結びつかない。

●2024 年に向けた戦いはどうなるのか

今回、台北の市街地に到着した瞬間の印象は、「看板やポスターが少ない！」ことであった。4 年ごとに見ていると、実際に選挙期間中の街の景色が変わって見えるのである。ただし、それは選挙戦にかける費用が減ったからではなく、おそらく**選挙の主戦場がリアルからネットに移行したから**であろう。

なにしろ台湾人は SNS が大好きである。使用率は Line が 96%、Facebook が 79.4%、Instagram が 31.2%、Messenger が 25.9%、WeChat が 20.7%だそうだ。そして大陸からは様々なフェイクニュースが飛んでくる。おそらく、日本の選挙戦など目じゃないほど高度な情報戦が展開されているはずだ。実際に昨年 12 月には、Facebook が「2020 韓国瑜総統後援会」のアカウントを閉鎖している。15 万人が「いいね！」していたが、ルール違反があったとのこと。**SNS 選挙の最前線は台湾**、と言っても過言ではないだろう。

さて、少し気の早い話をすると、次の 2024 年選挙はどうなっているだろうか。

国民党はいちばん不透明性が高い。かつては「世界一リッチな政党」と呼ばれたものだが、今では多くの資産を国有化されて昔日の面影はない。外省人エリートたちは後退し、4 年後は韓国瑜か郭台銘が主導権を握っているような気がする。

今回、新党「台湾民衆党」を立ち上げた柯文哲台北市長は、「天下三分の計」を狙うだろう。果たして無党派層の人気が続いているかどうか。

民進党は比較的わかりやすく、頼清徳副総統が候補者になるだろう。元行政院長（首相に相当）の頼清徳は、蔡英文総統に予備選挙を挑み、敗れたものの最終的には副総統ポストに収まった。もともと蔡英文は中道で現状維持派、頼清徳は左派で独立志向という組み合わせである。それでも下記のように「絵になる」ペアである。

ただし、**台湾総統選挙の歴史で同じ政党の 3 連勝はまだない**。史上 8 回目の台湾総統選挙はどんなことになるのか。筆者にとっては、4 年後の楽しみということになる。

民進党の正副総統コンビ（蔡英文＆頼清徳）	民進党本部で見かけたアニメ風のポップ

＜投票日翌日の”Taipei Times”紙から＞

”Taiwan needs absentee voting” Editorial

「台湾は不在者投票を必要とする」 January 12th, 2019

＊どうして台湾には不在者投票がないのだろう、と思っていたら、「そろそろ導入すべきだ」という意見が現地の英字新聞にちゃんと出ていました。

＜抄訳＞

今年もまた前回同様、数百万人が故郷へ帰る大移動が起きた。海外から戻った人もいる。

公民投票や立法院、総統選挙などがあるたびに「椅子取りゲーム」が始まる。これは資源の無駄であり、選挙システムにおける障害である。投票所までの旅に乗り気ではない、いや耐えられないという台湾人は多い。学生やゆとりのない人には金銭的負担も大きい。

台湾民主主義青年協会と台湾学生連合は今年、250 万 NT ドル（8.3 万米ドル）を集めて 3500 人の学生に旅費を提供している。立派な行いと言えるが、政府にはもっと良い方法がある。単に不在者投票を認めることで、本当は 10 年前にも検討されていたことである。

2013 年には法改正が実現している。しかし一時的に無効にされている。2013 年 3 月 18 日、中央選挙委員会の張博雅委員長が、不在者投票は「賛否両論がある第 4 原発の将来に関する公民投票」に使われるが、これを選挙に適用することはできないと付け加えた。

その 5 か月後に、立法院は総統選法と総統罷免法、公民投票法を改正した。この時点では 19 万人の選挙委員、投票日に働く 6 万人の警官と 22 万人の軍人、そして投票権のない地域に住む 55 万人の雇用者と 32 万人の学生は、別の投票所を使って良いはずだった。

しかし、選挙管理委員会の Web サイトは、現在ではそれを認めていない。「有権者は生まれた市や郡で投票しなければならず、不在者投票は台湾では行われない」とある。司法省の Web サイトでもこのことは確認できる。総統罷免法の 13 条は「有権者は、別段の定めがある場合を除き、住居の近くにある投票所で投票する」とある。例外は 2 つだけで、投票所のスタッフはその場で投票できる、および障害者は付き添いや代理人を登録しうるとある。そして海外からは、いかなる条件においても投票は不可となっている。

このような規制は先進国らしくない。ほとんどの国では、選挙前に別の投票所に登録することができ、海外からの投票も可能である。台湾の場合、中国からの投票は明らかに実現不可能だが、米国など他の地域からで許されない理由は考えにくい。少なくとも、台湾内部における投票所の変更は認められるべきであろう。

不在者投票の懸念は、ひとつはロジスティクス面、そしてもうひとつはセキュリティである。2018 年 12 月には、楊惟任教授が電子投票を推奨している。これらのシステムは他国では成功しているし、デジタル認証や電子 ID などの方法で守ることができる。当初は台湾島内で実施し、あるいは公民投票で先に実施して、後から拡大することも考えられる。

方法の如何を問わず、政府は投票を楽にして選挙参加を増やす方法を発見すべきである。

＜From the Editor＞　孤独のグルメ・台北編

1 月 11 日の歴史的な選挙結果を見届け、翌日になって「これは今すぐに書かねば！」と思い立ちました。それで午後から、ホテルに閉じこもって書いたのが産経新聞「正論」の原稿です。たまたま今朝の朝刊に掲載されていますので、よろしければご参照ください（あいにく最近の産経ニュースは有料になっておりますが）。

●総統選が示した民主主義の進化（2020・1・15）
https://special.sankei.com/f/seiron/article/20200115/0001.html

周囲のお誘いを断って作業に没頭し、夜になってようやく仕事に目途がついたら、途端に腹が減っていることに気がつきました。そう、まるで松重豊氏演じる「井之頭五郎」が乗り移ったかのように。どうでもいい話ですけど、年末のテレビは途中までは『紅白歌合戦』で、夜が更けるとテレビ東京『孤独のグルメ・大晦日スペシャル』に浮気しました。

何か食おう、と思ったけど、言葉の通じない街の「ぼっち飯」。さて、どうしたものかと思案をして、ここなら大丈夫だろうということで行ってみたのが、ホテルから MRT で 1 駅のところにある台北駅（台北車站）。フードコートで選んだのは、台南タンツー麺とルーロー飯でした。もちろんビールは却下。だって「孤独のグルメ」なんですから。

いや、これが旨かった。お代は 400 円くらいなのですが、何という幸せ。台南タンツー麺は、その昔、台北で駐在員お勧めのおいしい店に連れて行ってもらったこともあるのですが、これはこれで忘れがたい味となりました。

思えば「孤独のグルメ」は、事前のリサーチをしちゃいけないんですよね。井之頭五郎氏は、けっしてスマホで「食べログ」の星の多い店を探したりはしない。いつも行き当たりばったりで店を選ぶ。それで毎回「当たり」を引くのはちょっと嘘くさいけど、よく知らない土地で「ああでもない、こうでもない」と独りで悩むから面白いのであって、これはもう一期一会というもの。たとえそれが駅のフードコートであったとしても。

そういえば、インバウンドは 2 年連続で 3000 万人突破。今やどこでも外国人観光客を見かけます。筆者などは、ときおり東京駅地下の「ラーメンストリート」で行列している外国人を見て、「なーんだ、この程度で喜んでいるのか」などと思ったことがあります（正直、あそこで入りたい店って、あんまりないですよね）。

でも、彼らは東京駅で一期一会を体験しているのかもしれません。やはり異国を旅するのは良いものです。ツーリズムは成長産業であるだけではなく、人の心を満たしてくれる。今度はまたどこか異国の別の都市で、井之頭五郎氏のような「孤独」をエンジョイしてみたいものです。

＊　次号は、2020 年 1 月 31 日（金）にお送りします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記あてにお願します。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル　http://www.sojitz-soken.com/
双日総合研究所 吉崎達彦　TEL:(03)6871-2195　FAX:(03)6871-4945
E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com